

舞麗辞

表紙イラスト：有都あらゆる

二次元ぷち文庫

Kunochi

くー
あやめの
不覚

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『くノ一あやめの不覚』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



Kunoichi
くノ一
あやめの
不覚

舞麗辞

表紙 / 有都あらゆる

登場人物紹介

Characters

ゆめかがみ

夢鏡のあやめ

忍の間でも恐れられる齡二十のくノ一で、幻術を得意とする。人間離れした美貌と、成熟した豊満な肢体とを併せ持つ。

こうら

剛羅

仕事といえば雑用ばかりの下忍で、主たる忍術の腕はいまひとつ。一風変わった使い魔を操る。

「藩主謀反の証拠となる書状を掠奪せよ」

藩主松野義平衛門公の御城、三日月城。天守閣に祭られた角の如き飾り故そう呼ばれる我が国西の要城に、今宵一つの人影が躍った——その胸に密命を秘めて。

それは見世物小屋の影絵にも似ていた。ゆらり、と陽炎のようにゆらめいた影絵は、夜風に乗った木の葉の如くただっ広い庭を渡り、滝を遡上する鯉を思わせる素早さで石垣を駆け上る。

無論城内には厳重な警備が敷かれていた。しかし、侵入者は見回りによる無数の眼と、数えきれない鳴子とを巧妙にすり抜け避けてゆく。

目指すは天守閣、城主・松野義平衛門の寢室であった。

ヤモリの如き俊敏さで廊下をすり抜け、壁を駆け上り、天井裏を這う——そして目的の場所へと辿り着いた影絵は天井の木板に手を掛けた。

かたり。

木板をずらし、室内を覗く。そこにはまだ若い藩主が一人、寢息を立てて眠っていた。この城の主、藩主・松野義平衛門である。さしづめ眠れる獅子といったところか。寝顔まで、野心に満ちた顔立ちをしていた。

するり……人型の闇は音もなく畳へと降り立つと、熟睡する獅子には目もくれずに傍の引き戸を^{あらた}検め始める。

やがて一つの書状を見つける。その中身を検めた人影はフツと小さく笑みを浮かべた。そしてそれを懐へと忍ばせるや、また音もなく天井へと吸い込まれるようにして消える。天井裏を這い、壁を駆け下り、風に舞う塵のように廊下を渡る。そしてもう一寸で庭に出ようかというまさにその時。

「そこまでだ」

鋭い声が後方から飛んだ。影絵はびたり、と動きを止め、小さく息を吸うようにしてから声のする方へと振り返る。

侵入者の眼前にはいつの間にも現れたのか無数の忍が立ちはだかっていた。十や二十ではさくまい。おそらく五十人前後はいる。

枯葉色の忍装束を身に着けた男たちは皆、口元までを頭巾で覆っている。おかげで唯一覗く両の瞳だけが、真夜中の猫みたいに爛々と妖しく輝いていた。

幾十もの瞳に囲まれた影絵はゆつくりと、月明かりの下へと進み出る。纏っていた闇が金色の月光に剥ぎ取られ、彼は——いや、彼女は。ようやくその姿を現した。

華奢という表現がびたりと当てはまりそうな細い体躯。それを、藍色の忍装束で包み込んでいる。胸元が僅かに覗いており、その身のこなしからは意外なほどたつぷりとした肉の谷間が、鎖帷子越しにも見て取れた。

髪は磨りたての墨汁のように艶やかな黒で、それを後頭部で馬の尾みたいにして縛り上

7

げている。髪を結わいた血色の帯が、夜風にひらひらとたなびく。

女——もといくノ一は。侵入者でありながら頭巾の類は一切しておらず、その顔をまるで隠していなかった。

京人形のように切れ長の瞳は、長い睫毛に彩られ官女の如き優雅さを湛えている。しかし同時に、闇によって開いた瞳孔によって鋭い獣のような獰猛さを感じさせた。

鼻はあまり高くない。しかしそのすらりとした鼻梁が彼女にまるで作り物のような、浮世絵じみた美しさを与えているのは事実だった。肌が雪のように白いので、その美しい相貌と相まって御伽噺の雪女を連想させる。

唇は薄く、紅い——無論化粧などしていないので、べにの紅さというわけではないが、闇の中の紅は一層鮮烈だ。柔らかそうな唇は、よく熟れた桜の果実のように色づいて男たちの目を引いた。

眼も、鼻も、唇も申し分なく美しい。だが凡百の女と決定的に異なるのは、それらの部位が顔の中で最も均整の取れた位置にあるということだ。

それはほとんど作為的とさえ思えた。彼女の顔立ちが人形じみて見えるのも、まさにそれ故であろう。

「残念ね……こんなによい月夜を、血で汚したくはなかったんだけど」

ようやく口を開いた女の声色は、思いの外幼く愛らしい。しかしその言葉は、彼女がこ

の状況にまったく臆していないことを知らしめる。単なる虚勢とは思えない。真に落ち着き払った印象が、声からもその立ち姿からも容易に見て取れた。

なんにせよ、嚴重極まる警備をかくぐり城内にまで忍び込んだ女である。只者であるはずがない。そして彼らの脳髓の引き出しをひっくり返しても、そんなことのできそうな者の名前はただ一人しか思い浮かびはしなかつた。

「ふむ……あやめ、か。貴様、流幻衆・夢鏡のあやめだな」

一人の男のその言葉に、周囲が俄にざわついた。夢鏡のあやめといえ、西国随一のくノ一として名前だけは広く知られた存在だ。

噂によれば女は顔を隠しておらず、しかしその人相は誰も知らないと言う。何故なら——その風貌を見た者は、あまねく死を手向けられていたからだ。

なるほど、今日の前にいる女忍はそんな物の怪じみたくノ一の特徴にぴたりと当てはまる。だとしたら、その顔を見てしまった自分たちは——そう思い、男たちは騒然としたのであった。

「いかにも——ふふ、わたしの名を呼ぶとは随分な命知らずね。我が名は呪、我が名は不幸の先遣り。死に急ぐこともなかるうに——」

あやめ、と呼ばれたくノ一は艶かしいほど紅い唇に僅かな笑みを湛え、小声ながらよく通る美声で言の葉を紡いだ。

人形に表情が浮かぶ——それは美人画が不意に動き出したような、浮世離れた印象を与える。

「ふ、ふん……よくぞまあこの警備網を潜り抜けてきたものだな。流石は闇の世界にその名を轟かす女忍と、とりあえずは褒めてやろう……しかし。いかな貴様とて、この人数を果たして無事に切り抜けられるかな？」

ククク……敵忍の頭と思しき男が喉の奥で嗤う。あやかしの如きくノ一に対する恐れがないわけではない。だが、一対五十ではいくらなんでも多勢に無勢。男の中では勝機が恐怖に勝っていた。

ところが、窮地に立たされたはずのくノ一は、それでも涼しい表情を崩しはしなかった。「確かにこれは少々不利と見えるわね。こちらも加勢を呼ばせてもらおう……」

あやめは余裕たっぷりにそう呟くと、口の中で何かを呟き始めた。本人以外にはとても聞き取れなさそうな小声。同時にゆっくりと能を舞うように緩やかに手を広げ、くノ一は印を結んでゆく。

その瞬間。切れ長の瞳の中の漆黒が、クンツと猫のように縦長に狭まった。女の蠱惑的な眼差しは月明かりを反射して、しろがねが如くキラリと輝く。男たちの視線が無意識の内にそれに囚われる。

「いかん、眼を見るな！ 奴は人をよく惑わす……」

忍の一人が咄嗟に指示したが遅かった。

「臨・兵・闘・者・皆・陣・烈・在・前……轟ッ!!」

美しき女忍は一気に印を切るや、その小柄な肉体のどこにそれほどの体力があるのか地面を揺るがすほどの気を吐いた。

ぶわっ!!

夜の冷えた大気が、あやめの気合にビリビリと痺れる。それに呼応するようにして、くノ一は実体なき朧のように翳みだした。

男たちの幾人かは必死に臉を擦ったが、無駄だった。他の景色に異常はない。ただ女の姿だけが、誤って半紙に垂らした墨滴のようにじわり、と滲んで見えた。

ぞわ。

ぞわ、ぞわ。

ぞわぞわぞわ……。

滲む女狐は夜の闇に溶け出すように、夜霧の如く四散する。二重に、四重に。女の像が幾重にも重なり、またぶれた。

「な……なんじゃあ……」

敵忍の一人が呻いた。無理もない。彼の目の前には、今や無数のくノ一が——否。無数のあやめが立ちはだかつていたのだ。

十、二十……いや、まだいる。同じ猫目の、同じ黒髪の。見目麗しき女忍が、見世物小屋の合わせ鏡のように限りを知らずに増えてゆく。

「さあ……これで、五分になったわね？ それとも……ちよつと多すぎたかしら」
幾人ものくノ一が揃って紅い唇の端を歪め、クスクスという微笑が重なった。

「く……ぜ、全員残らずたたつ斬ってやるまでよつ!! やれつ、やれえつ!!」
頭目の号令に男たちは揃ってくノ一に斬りかかった。

数えきれぬほどの刀が次々と闇色の女を斬りつける。あるいは逆に、幻影であるはずのくノ一が手にしたくないで男を薙いだ。

ブシッ!

ジュバババババババツツ!!

水袋を引き裂くような音と共に紅い、というよりは黒い、と表現した方が的確と思われる血飛沫が四方で飛び散る。旅芸者の水芸を思わせる、それは一種不気味な華やかささえ感じさせる光景であつた。

ほどなくして。庭に立つ者はあやめただ一人となつていた。

「あつけないわねえ……」

死屍累々の最中に立つた黒髪のくノ一は、形よい唇を歪ませて小さく嗤つた。

ちなみに彼女はただの一度も剣など抜いていない。それどころか武器らしい武器も手に

しなかったし、攻撃らしい攻撃もしていない。

ただ、呪を紡ぎながら立っていただけ。

男たちは——互いを敵であるくノ一と錯覚して仲間同士で斬りかかり、勝手に自滅したのである。

卅

騒ぎを聞きつけた侍がそこらじゅうで搜索している。おそらく城壁の周辺は更に嚴重な警備を敷かれているに違いない。

「あやめ殿」

身を低くして庭の石影に潜んでいたくノ一を呼びかける声。声は池の中から響いた。

「剛羅か……フン、遅いわよ」

あやめは冷たい声でそう呟き、刃物じみた視線を水面へと投げる。

満月の反射する池の表面に、ぼんやりと黒い影が浮かび上がる。そしてぼちゃり、と小さな音を響かせて、一人の男が顔を覗かせた。

白い頭巾を被った頭部しか確認できないが、かなりの大男だろう。剛羅、と呼ばれた忍は眼だけで会釈をすると、

「抜け道は確保してあります。どうぞ、こちらへ」

早口でそう告げ、くノ一に向けて細い竹筒を一本投げてよこした。

女忍は受け取ったそれを二度三度振って空洞に入り込んだ水を払うと、ふう、と小さくため息をついた。

「お前は馬鹿なの？ わたしの任務は書状を奪い、お頭様の下に持参すること。破棄することではなく、よ。水に浸けて、無事に持参できると思う？」

店主が奉公人でも咎めるような口調で女忍が大男を叱責する。

「も、申し訳ございません……本来でしたら大罈を用意しておりましたものを、風の向きが悪うございまして……今先ほど、池底に抜け道を見つけ出したところでございまして」
男はしどろもどろだ。見た感じでは男の方が一回りほど年上に見える。しかし毅然とした態度のくノ一と相對して、池から顔を覗かせる大男は天敵を前にした針鼠のように丸く小さくなっている。

「もうっ……いいわ。そこでちょっと待つてなさい……顔は上にでも向けときなさい！
いいって言うまでこつちを見たら駄目よ。勝手に向いたら——殺すからね」

高飛車な態度で命令すると、男は慌てふためき月明かりの方へと視線をそらした。
しばらくして。

「フン、もういいわよ……いつまでもその間抜け面を天に向けていないで頂戴」

許しを得て剛羅が視線を戻すと、くノ一は竹筒を手に、既に池の中へとその身を沈めていた。

膾壁を蛸吸盤に擦り立てられ、くノ一はギュッと身を竦ませる。入り口をえぐられただけで腰が抜けてしまう。まるで腰骨を快感の木槌か何かで打ち砕かれたようだった。
(ふっ……太いいっ……!!)

あやめが今まで受け入れたことのあるどの男よりも、この魔性の肉脚は逞しかった。しかも無数のイボ吸盤が絶えず柔らかな牝粘膜を責め苛んでくる。

その上この魔物は男根と違い恐るべき長さを有しているのだ。ずにつ、ずにつと尺取虫の如き伸縮を繰り返しながら、蛸脚はゆつくりとしかし確実に牝の胎内へと埋没してくる。
(どっ、どこまで入るのおおっ……!!)

目の前で己の股座に化け物の一部が侵入している。己の脚と同じくらいの長さを持つ蛸の肉紐が、ずるずると胎内へと飲み込まれてゆく様子はまるで悪い夢のようだ。

「蛸は脚が入れば全身入り込めるらしいぜ……知ってるかい？ そいつらは壺みてえに狭くて暗いところが大好きなんだ。肉の壺だって喜んで入るぜえ……言ってる傍から、ほおら」

脚を根元まで埋没させた怪異は、あろうことかそのまま本体である頭部まで陰裂へと捻じ込み始めた。他の脚で柔らかな股座の肉を割り開き、狭い肉穴をぐいぐいと押し広げてくる。

「な……やめ、入るなっ、入ってくるなァッ!!」

尻孔に力を込め必死に侵入を阻止しようとするが、粘液のせいで歯止めが利かない。それどころか中途半端に締め上げた肉穴で、淫らな怪異を食んでしまう。グニユリとした感触が、股座に切ない痺れを刻み込む。

「ふあつ!? くつ、こ…こんなことして…ただで済むと思う…な…ハァンッ!」

ぬるつにゆるうう…押し戻そうと食い締める牝穴の意思などまるつきり無視して、魔蛸はあやめの女目掛けてその身を滑り込ませてきた。柔らかな肉穴は弾力豊かな怪物に限界まで割り裂かれ、悲鳴を上げんばかりに口を大きく広げさせられる。既に大の大人の拳、二つ分は拡張されていた。

「ただで済まねえのはお前のマ○コじゃねえのか…へへ、ぶっ壊されて餓鬼が産めなくされないように、せいぜいお祈りでもあげてな」

皮肉たっぷりに放たれた剛羅の返答も、苦しさで耳に入らない。魔蛸の侵犯は文字通り悪魔の所業であった。

「あがつ、いあが…もう、入るなあ…だつ!? そこは吸っちゃ…ひぎいいひいいい——つっ!」

拡張され、伸ばされきつた牝粘膜を吸盤で吸いつかれて金切り声を上げてしまう。痛みならかなりの部分まで、我慢できる自信があった。だが、魔生物による肉責めはあやめの想像の範疇を超えていた。

痛みということ言えば、それは地獄だった。妊娠もしていないのに、産道に赤子並の化け物を通しているのだ。苦痛を感じないはずがない。まったく、膣壁が張り裂けないのが不思議なくらいだった。

だというのに、そんな痛みさえも遥かに上回る圧倒的な快感が子宮の奥から雪崩を打って押し寄せてきていた。腰骨がビリビリと痺れるほどの甘い電流が下腹部を穿ち、大口を開けさせられた秘裂がひくひくと痙攣させられてしまう。

ずりつむにゆるるりいいい……粘膜を吸盤で擦り立てながら、軟体生物は延々と膣道をえぐり続けた。快樂にほぐされた牝穴は蕩けたようにぐにゅりと道を広げ、怪物の肉脚をくぼくぼと恥ずかしげもなく啣え込んでゆく。

「んはっ……くうううう……んひいつ!! いやっそんなとこまで……はひいっ!!」
膣道の途中、恥丘の裏側辺りを吸盤で擦られた瞬間、くノ一はビクッ! とこれまでにないほど激しく取り乱した。

膣内で炸裂する刺激は雷撃に股座を穿たれたようだった。身体の芯みたいなものを鷲掴みにされ、炉に入れられてドロドロに溶かされてしまったかのようだ。身体中の毛穴という毛穴が開ききり、脂汗が玉になって弾けた。

しかも魔物の吸盤はそんな勘所にびったりと密着し、チュウチュウと嘯みつくように吸引し始める。

ジンジンと膀胱の辺りが痛いくらいに痺れだす。差し込むような刺激は、尿意を甘く切なくしたようななんともいえぬ感覚で、下腹部で膨れるようにして激しく疼き狂った。

「あつあ……ああんっ!! だつもお吸うな……はっ、そこは……吸うなあああ……!!」

海洋生物が人の言葉など理解するわけもない。仮に理解したとてやめる道理もない。魔蛸は女の反応を楽しむように、じっくりと極上の肢体を嬲り始めた。

吸盤は肉壁を優しく接吻し、次いで啄ばむように食いつき、終いには癒着するようにへばりつく。肉穴全体に散りばめられた牝の急所を一つ残らず吸引され、桃色の雷撃が腹の底で鉛玉みたいに鈍重な快楽の塊をこしらえてゆく。

「おやおやいかなさいましたかあやめ様。オマ○コがもうねちよねちよに蕩けてますよ? あまりによすぎて、粗相でもしちゃいましたか?」

「だ、誰が……こんな、こんなものでそんな……あああ! んん……あああ……」
強がろうとして啖呵を切るも、途中で喘ぎに取って代わられる。却って無様な淫声を喉の奥から絞り出した女忍を前に、男はギャハハ、と下品に嗤った。

ぐ、ぐ、ぐぐぐ……ぐにゅちゅぶつ!!

「ふぎはがああああつっ!!」

不気味な音が股座で炸裂し、胎内の圧迫感が幾倍にも倍加する。慌てて自分の股間を覗き込むも、もうそこに蛸の姿は見えない。完全に、女の中へと潜り込んでしまったのだ。

辛うじてその頭部の一部分が咲き綻ぶ牝華の間から覗いている。その様は、まるで今にも赤子が生まれ出て来ようとしているようだった。

借り腹の魔性は占領した胎内を好き勝手にいたぶり始める。

ぬぷっ…ぬぽおお…。

緩慢な動きで怪異は身を振じらせ、全身を使つて膣道をじっくりとほじくり返してくる。悪魔の胎動に腹が弾ける恐怖を孕みつつ、くノ一は胎内を掻き混ぜられるという普通のまぐわいではあり得ない激感に打ち震えていた。

(くっ苦しいのにつ…苦しいのにいっ……なんで、なんでこんなのが…)

気持ちいい。

あやめは魔物の人知を超えた責めにも僅かながら悦びを感じ始めていた。最初は痛いだけだったのに。痛みが恒常化し慣れが働いた途端、膣奥で子宮がうずうずと淫らに疼き始めてるのが自分でも分かった。

(どっ、どうしてこんなことにいい…ううっ、わたしはくノ一…女を捨てた忍の者…
…女みたいに、肉悦になど、気持ちよくなんか…)

身体の内から滲み出してくる牝快感を否定するものの、いくら頭で考えたところでその女体は蛸による膣粘膜への陵辱にじわじわと飲み込まれつつあった。

蛸に胎内を侵犯され、魔辱に恍惚を感じ始めるあやめ。しかも魔性は乳を苛める者、腹中の者以外にもまだもう一匹いるのだ。

そして海洋の魔物が狙うのは、なにも女陰ばかりではなかった。

「んひっ!? おっ、おいそこはやめろ…ひっ、やめろって言ってるだろおおおっ!!」

突然くノ一は素っ頓狂な悲鳴を上げてしまう。蛸脚の一本が、彼女の脰色をした放射状の窄まりを突いたのである。

しかもそれは偶さか触れた、という感じでは全然なく、まるで括約筋の硬度を確かめるようにツン、ツンと肛門を小刻みに突いてくる。確実に、侵入を目論んでいる動きだ。

排泄孔を打たれる衝撃は鈍い快感となつて背骨を駆け上る。堪らなくおぞましいのに、どこかもどかしい。

「ほお、今度はケツの穴かよ。すけべな蛸だぜ…。あやめ、可哀想になあ…。そいつらはどんな小さな穴からだつて容易に入り込んでくるんだぜ…」

男の言葉を裏付けるように、蛸はねつとりとした脚先をあやめの桃孔へと捻じ込んでくる。

(ひっ、本当に、入ってくるのっ!? わた、わたしの…尻につ!!)

既に胎内を占領されているのだ。これ以上腹に入るわけがない。これ以上受け入れたら——本当に、腹が裂けてしまう。

「バカッ！ やめろと言っているのが聞こえないのっ!! 変態っへんたいツッ!!」
怒声を発し、ビクビクと細身を躍らせて拒絶の意を表すが、蛸はぬるぬると脚を蠢かせて放射状の皺をほじくり続ける。

尻で感じる軟体の感触、それは想像を絶するおぞましい感触だった。敏感粘膜を襲う魔脚は練りたての餡のように熱く、柔らかさの中に芯の通った硬さがある。そしてその表面はじゅんさいのようにヌルヌルとぬらついているのである。

「く……この、変態蛸があ……」

もう小指一本分くらい直腸に入り込まれてしまったろうか。腹の中が嫌な冷たさを感じる。臀部一面に鳥肌を立てながら、尻に吸いつく化け物を侮蔑する。しかし元々自尊心どころか理性さえ持ち合わせない海洋生物は、お構いなしに不浄の門をえぐり続けた。

「ぐふっ、まだまだ……先つちよが入れば脚一本。一本入りや二本……あとはマ○コの時と同じさ。最後には、全身まで入り込んでくるだろうぜえ……」

ぬぷっ、ぬぐううう……魔物は筋肉を硬直させ、より深くあやめの直腸を掘り進む。一生懸命括約筋を食い締めているのに。粘液を纏う魔性は彼女がもう限界だろうと思うその遥か先まで侵犯してくる。恐ろしく長い舌に、腹の底を舐め回されているかのようだ。侵入が進むにつれ息苦しさも増し、無数の脂汗が額を転がった。

ニチニチと小さな粘音が肛口から湧きあがり、イボ脚がじつくりと直腸内を探りまわっ

ているのが分かる。腹の中を直接摩擦されるのは、絶対手の届かない場所を虫に刺されたように堪らないもどかしさと疼痛を身体の内側へと植えつけてくる。

にゆるつにゆるつくぼつぐぼつ……悪魔は次第に脚を前後に抽送しだした。肛門口が吸盤に激しく擦り責められ、灼熱がカアツと迸る。流石に肛門まで鍛えてなどいないくノ一は粘膜への攻撃に苦悶する。

（あついつ……痛ッ……あれ？ いた……く……な、い……？）

だが、繰り返される内熱気に慣れた桃穴には既に痛みなどなかった。あるのはどこか熱病に浮かされた時のような焦燥と腹の底から湧きあがるジンジンという痺れだけだ。

それは排泄の快感に近かった。化け物の脚にほじくり返されているせいで、肛門が錯覚させられているのだろう。しかしそこには同時に、廁では決して味わったことのない身悶えしそうな狂おしさが滲んでいた。

（な、なんなの……この感じっ……）

尻孔から発せられる未知の感覚に戸惑うくノ一だったが、それが「気持ちいい」ということだけは理解していた。理解していたのだが、認めたくなかった。

（くうっ……うそだ……こ、こんなので気持ちよくなんてえ……）

必死に言い聞かせ、自分をたばかる。そんな女忍をあざ嗤うように、魔性はそれまで尻たぶを鷲掴み押し広げていた他の脚でも菊皺を攪り、肛門と魔脚の隙間から更なる侵入を

試みる。

「ふひっ……あつ、あくつう……やめ……ろ……おをつ!!」

一本だけでも腸粘膜は張り詰めるほどに引き伸ばされているのに。更に七本も追加されたら確実に肛門が壊れてしまう。直腸が破裂してしまう。来るべき激痛にくノ一が青褪める。しかしそんな恐怖も杞憂に過ぎなかった。

「つ……あつ……ふぁあつ!!」

肩透かしを食らって女は間の抜けた悲鳴を上げた。痛みだなんてとんでもない。尾てい骨から背骨を突き抜けたのは、それまで以上に鋭い快感の閃光であった。

骨を直接木槌で打たれたように身体が芯からビリビリと痺れ、声が裏返り、舌が引き攣る。腸奥が燃えるように熱く、腹の中で淫気にほだされた腸管がいやらしく蠕動するのがはつきりと感じられた。

（ううっ……駄目だ……気持ち悪……いい！尻を……掘られるの……いいっ！）

身体中に鳥肌を立てながら、最早肛悦を認めないわけにはいかないあやめであった。肛悦を受け入れた途端背中がジンジンと甘く痺れ、くノ一は水を浴びた子犬のようにブルツと身震いした。

ぬぐつぬぐつにゆぶるにゆぶりゆっ……女の精神的な敗北を察してか、蛸脚の動きは加速度的に早まり獲物を更に追い詰めてゆく。肛交の悦びを知ってしまったあやめの意識は

その背徳的な痺れに飲み込まれ、身体中の神経が蝟に嬲られる桃孔へと集中する。

(いっ……しりがっしりがいいっ……ううっ……このままじゃわたしいい……)

「あっああ……んっ……だっ……やめ……ひやめええっ!!」

肛門をきゅぷきゅぷと開閉させ、頭を振り乱して鳴く声は既に桃色吐息となりつつあった。四肢がじんわりと蕩けるように痺れを起こし、大きな悦楽の波が身体の内側から確実に迫ってくる。

あやめとて生娘ではない。果てたことくらいはある。しかし尻でそれを味わうのは初めてであった。いつもとは異なる予兆に、女は怯えるように身を小刻みに震わせる。

だが、女がいかに身構えようと蝟は規則的に牝尻から淫悦を掘り起こし、捕らえた牝を極みへと送り届ける。

(ああ、いやあ……は、果てるっ?! わたし、わたし——尻で果てるうっ!!)

「ひぎっ、ひぎいいうううっ……いっ……いっ……ウウウツツ!!」

びくっびくびくびくううっ!! 肛門から瞬いた絶頂の閃光に貫かれ、拘束された女体が水揚げされた鮮魚のように一際大きく飛び跳ねた。

頭の奥がズキズキと痛んで意識が翳む。呼吸困難になったように息が滅茶苦茶に乱れ、筋肉が一気に弛緩する。

ずみゆにゅびゆにゅにゅるぶりゅううう——!! 地下牢に反響するひどく下品な粘音。

裏切り者が絶句する。鼻頭に押しつけられた形となつたくの一の束ね髪、それを結わいている紅い細帯がいつの間にか巨大化している。

いや、巨大化したのではない。おそらくは、最初から、不自然なほど大きかったのだ。剛羅がただ、それに気づいていなかっただけなのだろう。

「目くらまし……」

男は誰に言うともなくそう呟くと、結び目を解き帯を取りあげる。束ねられていた黒髪が四散して、腰まで届く艶やかな長髪が躍った。芳しい牝臭が一段と濃くなるが、男は手元の赤帯に気を取られている。

やけに分厚い帯は幾重にも織り込まれていた。その途中に、油を染み込ませた和紙が挟み込まれている。それを更に広げると……そこには……。

「てめえ、こんなところに……つふふ……あはははははは!! こいつあ傑作だ! 灯台下暗したあよく言つたもんじゃねえかよなああやめ? いつの間に俺に術を掛けたんだ?」
遂に。書状を手にした裏切り者は一際高い声で豪快に笑い声を上げる。しかし当のくの一はそれどころではなかった。

「わかつたからあつ! しよじょうあげたんだからああつづきつはやくつつづきいいつ!! おちんちんしてよつ、おま○こずぶずぶしてえええつ!!」

ほつれ髪のくの一は、腰をのの字にくねらせて牡をせがんで来る。命よりも大事なもの

を差し出したのだ。これで終わりでは酷過ぎる。

「イヒヒ……言われるまでもねえ！ さあ、今から極楽に送ってやるぜええ!!」

天下を手に入れた將軍のように上機嫌な声でそう叫ぶや、男はくの一の丸尻を抱え込む。そして亀頭を膣口へとあてがい、一気にあやめを刺し貫いた。

ズニユブブブウウウウ——ツツ!!

「っはああああああんつつ!! 硬いつ！ いいつ！ おつきいいいいつつ!!」

ばさりばさりと長髪を振り乱し、墮落した女忍が喘ぎ狂う。子宮まで押し潰さん勢いの男根の逞しさに、膣壁は蕩けるように纏わりつく。もう二度と離したくないかのようにしつかりと啜え込む。

触手らの責めも苛烈さを極めた。四肢を覆い尽くさんばかりに巻きつき、前進後退を反復して絶えず牝肌を愛撫し続ける。

尻をほじくっていた肉紐は更に深く潜り、直腸どころかみぞおちの辺りまで到達していた。魔物の通ったところは媚毒を塗られたように甘く切なく疼くので、腹の中の複雑な臓物の形状を生まれて初めて意識させられる。

無数の亀頭先端が乳首と陰核をその鈴口にて貪り、まるで歯のない乳児の口みたいなそれであちゅうちゅうと吸い責めてくる。

「ああっひいいい……おっぱいっ!! ちくびがあっずきずきいっつうのおお……ふあ？

……はぶぐごぶうっ!!」

魔根は喘ぎ声しか発さなくなった牝の口腔にも侵入し、食道を穿つ。飽和状態にまで煮しめた蘭のような、毒々しいほどの甘さと芳しさが味蕾を潰す。

「ごっふおごっもごおおお……!!」

呼吸を塞がれたくノ一は息苦しそうに身悶えるが、男根触手はずるずると女の唇に飲み込まれてゆく。尻同様、意識などしたことの無い食道の感覚が分かる。快樂受信の機能などないはずの、喉の肉までが淫らに痺れた。

もう息苦しさを感ぜない。それさえも、心地よかった。白目を剥いて唾液と涙を垂れ流し、顔には薄ら笑いすら浮かべながらあやめは限界の近づきを感じる。

「ククク……イカせてやるよあやめ……今まで味わったことのないほどの悦びでなあっ!!」

ズヌグッ!! 肉杭が一際深く膣道をえぐった。胎内に溜まり込んでいた蜜液がぶちゅりっ! と噴出し飛散する。子宮がズンッ!! と重い衝撃を食らい、脳天まで駆け抜ける。

どびゅぶりゅっ! びゅくびゅくびゅくんっ!!

瞬間、膨張した陰茎が一気に爆せて大量の精虫をくノ一の膣内へと吐き出した。

「おごっおごぶほおあはあんっ!! ひっ射精でるっ! おま〇ここにどくどくっつてえっ、あっついでせえーえきいっばいだされてるうううっ!!」

絶頂感に顎を仰け反らせたあやめは、喉奥の偽牡を吐き出した傍から激しく牝鳴きする。熱湯を注ぎ込まれたようにひたすら熱く、膣肉がぐずぐずに溶解してしまいうだ。

触手どもも主の放精に合わせるようにびくびくびくつ！ と脈打ち、あるはずのない精をぶちまけた。

口を犯していた触手は高潮しきつた頬にぐりぐりと押しつけながらブシヤリと生臭い液体を放つ。白濁した粘液は牝の垂れ流した汗や涙、鼻水や唾液らと混ざって美人画の面影を女郎小屋の売女以下に貶めた。

腐液の射出は無論、乳先や肉真珠を食む鈴口でも同様に処される。まず、右胸を食っていた魔根が果てた。

ずぶしゅつ！ つ：びゅしつ：ばびゅぶぶじゅばあああつつ！！

「はひいつむねえがおおつ、胸イクツ、ちくびでいぐううう——つつ！！」

勃起乳首に押しつけられたまま射精の砲撃を味わわされて、乳突起を無理やり引き千切られるほどの衝撃が女忍を襲う。膣内射精で絶頂の最中にあるためか、蛸に果てさせられた時より更に数段刺激が強い。

ビュツ：ビブジュバオツ！！ ビュシユツシイイイ——ツツ！！

「きはあがつ！ ひだりいいつ！ ひだりもイクツ、おっぱいりょうほおイクウウつ！！」一寸遅れで左の乳突起が魔射精の餌食となる。撃ち込まれる衝撃にたわわな乳房がぶる

んぶるんと波打ち、悦びを乳峰全体へと広げてしまう。乳根の奥底から呼び起こされたじわりと滲み出す快感に、外から撃ちつける差し込むような痛悦。二つの異なる乳悦に、肉釣鐘は際限のない快感地獄へとハマってゆく。

乳悦に失神する間もなく、尻に憑いた魔性が精を放った。

どびゆるどびゆるどびゆるぶつびゆるぶつびゆるぶつびいいいいいいいい!!

「おほっ?! おごおおおおお……おひいりがっ……ひっ、んいひいいいい……!!」

腸管が裂けるほど大量の汚液が、腹に直接注がれる。油を染み込ませた反物みたいに、直腸壁は肛悦の炎に一気に焼け爛れる。いや、尻射精が汚すのは直腸ばかりではない。腸管を逆流して臓物を駆け上り、五臓六腑を汚す勢いで尻奥の鈴口はどくどくと射精し続けた。

それでも苦痛はまったくくない。むしろその逆で、桃色の閃光が肉の内側で眩いほどに瞬いた。魔精の染み入った臓器がうずうずと悦びに震えて甘痺れを起こし、神経という神経が快感以外を寄せつけない。

まるで全身が剥き身の陰核にでもなつたかのような……狂悦に吹っ飛んだ脳髓で股座の肉芽を思い起こした瞬間、止めは刺された。

ドビュシユビュブワアツツ!! ドビイシユリツ、ビュシユブシイイ——ツツ!!

股座から脳天までを一気に貫く快感の閃光は、地獄絵図にある針串刺しを思わせた。

「ひがつひつイクツイグウウつ!! イクのつイツてるのつおっぱいもつお、お尻もなのおつ!! 全部つぜんぶううつ: ああつまつまたくウウつ!! おま○こまたイツちやうのおおおお——ツツ!!」

まるで、イクゞ以外の言葉を忘れたかのように、くノ一はひたすら自らが極めていることを、どこで果てているのかを吠え立てる。しかし追いつくはずもない。身体中で、ひつきりなしに絶頂の引き金を引かれ続けているのだ。いつしかろれつが回らなくなり、女はただ声にならない絶叫を、獣のように咆哮し続けるだけになった。

喉を絞って喚き散らしながら交尾する。その様子はもう冷徹なくノ一でも、見目麗しい女でもない。最早人でさええない、一匹の卑しい獣でしかあり得なかった。

卅

それからどれだけの時間が経ったのか。女は喉を噎らし、夏バテした犬みたいにだらりと桃色舌を垂れ流して放心している。

触手は今も女体を苛め続けていた。快楽に墮落したあやめには、もう二度とそれを消し去ることはできないのかもしれない。死ぬまで、肉悦に狂い死にするまで目に見える幻影、手に取れる幻によって陵辱され続けるのだろう。

ぶぶつ、ぶぶちゅつ……尻孔からは、臓器を満たしてさえ女体の中に収まりきらなくなつた魔触手の淫液が肛門と魔肉の狭間から滲み出し、下品な音を放ちつつ泡立っている。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>